

## 2. あやめ園～愛友酒造～川辺巡りコースガイド

あやめ園→天王河岸・本間自準亭跡→磯山邸・津軽河岸→仙台河岸→城米河岸→愛友酒造→硯宮神社→二十三夜尊堂→前川南岸道路→あやめ園

集合場所： あやめ園



水郷潮来観光ボランティア連絡協議会

## あやめ園～愛友酒造～川辺巡りコースガイド 【所要時間】約2時間

あやめ園（トイレ）→天王河岸・本間自準亭跡→磯山邸・津軽河岸（トイレ）→仙台河岸→城米河岸→愛友酒造（トイレ）→硯宮神社→二十三夜尊堂→前川南岸道路→あやめ園（トイレ）

### 1. あやめ園



↓ 6分

### 2. 天王河岸

素鷦熊野神社の南に位置し、素鷦神社が天王原から文治4年6月に遷座された地で、天王河岸の名前も素鷦神社つまり天王様の名によります。今は、潮来祇園祭時に御仮屋を建てる場所として鳥居と常夜灯などがあります。現在は天王河岸は埋め立てられています。



↓ 3分

### 3. 本間自準亭

延宝10年（1682年）に本間道悦は潮来天王河岸に居を構え、「自準亭」と名付けた診療所を開設し、困窮する村民に無料で診療を行いました。潮来に居を構えた理由の一つとして、芭蕉の禅の師ともいわれる仏頂和尚が江戸深川より鹿嶋の根本寺に移り住んだことで、本間道悦は根本寺に近い潮来を選んだと言われています。

芭蕉は貞享4年（1687年）8月、鹿島の山の月見を志し門人曾良と宗波を伴って仏頂和尚を訪ねて旅に出、その帰路本間自準を訪ね、現在長勝寺にある三吟の句を詠んだとされています。

ねぐらせよ 薫ほす宿の友すづめ (本間自準)

あきをこめたる くねの指杉 (桃青・芭蕉)

月見んと 潮ひきのぼる 舟とめて (曾良)



この時の紀行文が『鹿島紀行』として知られ、『奥の細道』の2年前のことです。

↓ 2分

### 4. 磯山邸・津軽河岸

磯山邸は明治32年に建築された日本家屋を改築した、古き良き時代の潮来の佇まいを残した古民家です。

延べ床面積約110平方メートルの木造平屋建て。間取りは10畳1間と8畳2間で、いずれも和室で、家の西側には約90平方メートルの広さの庭もあります。

建物としての特徴を挙げると、土間から内部を見上げると、太い梁（はり）と約30cm角の檜（けやき）の大黒柱が目に入ります。さらに、3種の組子細工が施された引戸があり、東側の壁には微細な彫刻が施されている欄間を移設し



た窓枠があります。また、床の間の横には非常に精緻な組子細工の窓があり、この組子細工を作成するだ  
でもかなりの時間を要するという、往時の潮来職人の巧みな技のすごさが感じられます。

「津軽屋敷」は津軽藩の記録によれば、江戸への御膳米の輸送が開始されたのは、寛永2年（1625年）  
となっています。この「御膳米」とは、江戸藩邸での自家消費のためのものでしたが、やがて、江戸市場  
での換金用の米も運ばれるようになりました。その後元禄期  
までの間には「屋敷」が必要となるほど、津軽河岸を利用して  
津軽産の物資の輸送が増えたと言えます。

↓ 9分

5. 津軽河岸出発



↓ 5分

6. 出島橋



↓ 2分

7. まこも橋

・・・・工事中（2022.06.30現在）

↓ 3分

8. 仙台河岸跡・千石橋

「茨城の民族」第5延方新莊桜涯氏の  
論文「汐来における仙台と津軽の藏跡」  
によれば、仙台藩の潮来屋敷は慶安2  
年（1649年）に置かれ宝暦6年  
(1752年)に廃止されたとの記載が  
あります。川筋の変化の他に、潮来で  
海船から川舟（高瀬舟）に積み替える  
利根川経由の他に、海船で直接江戸  
まで運送する東回り廻船の利用が主流  
になったことが津軽藩の潮来屋敷が廃  
止された理由と考えられます。



↓ 10分

9. 上米河岸跡・辻大橋

城米河岸は水戸藩の河岸で、城米の集  
積地であった。現在は住宅地になって  
いますが、当時は倉庫や役所、関係役人  
の住居が立ち並んでいたとされます。

この河岸は水戸藩が置かれたころに設  
置されたと考えられています。



↓ 7分

10. 愛友酒造着

愛友酒造工場見学スタート



見学、土産物購入約40分

江戸時代から「糀友（こうとも）」の屋号で親しまれた糀屋で文化元年（1804年）の創業です。

「愛友」は友を愛し相睦み肝胆相照らすという意味が込められ、社是は「四海皆兄弟」です。水は「大生神社」の湧水と同じ水脈の井戸水を使い、米は潮来産米です。

全国新酒鑑評会金賞受賞蔵で酒造見学は年中無休です。

↓ 40分

#### 1.1. 砥宮神宮

平安時代末期の治承年間（1160～1180年）源頼朝が戦勝祈願の為、鹿島神宮（茨城県鹿嶋市：常陸国一宮）の参拝する際この地で、祈願文をしたため、その際利用した硯を当社に奉納したと伝えられています。

江戸時代に入り水戸藩2代藩主徳川光圀がこの故事を聞いた事から頼朝縁の硯を御神体として社号を硯宮神社に改めています。

現在の社殿は昭和54年（1979年）の火災で焼失後、昭和56年（1981年）に再建されたもので、拝殿は入母屋、銅板葺、平入、桁行3間、正面1間向拝付。本殿は一間社流造、銅板葺。

例祭は毎年7月下旬の土日曜日、御神輿渡御と山車が曳き廻が奉納されます。祭神は応神天皇。

↓ 3分

#### 1.2. 二十三夜尊堂

延方郷校は、この地方の南郡奉行小宮山楓軒の尽力により設立され、元加賀藩士沢田平格の他に、久保木幡竜、宮本茶村なども教鞭をとり、儒学の他に医術、武術などを教える多くの人材を育成しました。この郷校にあった聖堂（孔子廟）は、明治12年（1879年）に移築され、二十三夜尊堂として現存しています。学問の神様孔子を祀るこの聖堂は、光圀公が招いた儒者、朱舜水が制作した模型を元に作られたといわれます。朱舜水は水戸藩に聖堂を建てることを夢見ていましたが叶わず、その模型により後世に建てられたのは、湯島聖堂と延方聖堂だけでした。湯島は震災、空襲で消失してしまいましたので、移築後修復されていますがこの聖堂だけが貴重な教育遺産として残っています。屋根には孔子廟には必ずある鬼狛頭という神獣が載っています。文政2年（1819年）落成時には8代藩主斉脩公直筆の「至聖先師孔子神位」の木碑が安置されました。

二十三夜尊堂の建物は、入母屋、銅板葺、桁行3間、梁間2間、平入、寺院建築でありながら随所に当時の郷校建築の要素が見られる独特な建物で、明治初期の御堂建築の遺構として貴重な事から、昭和49年（1974年）に茨城県指定有形文化財に指定されました。

↓ 10分

#### 1.3. 辻大橋

前川南側道路を通り、桜見物をしながらあやめ園へ向かう。

↓ 20分

#### 1.4. あやめ園着

